

参加者一覧 .....02  
連作欄 8首の連作 自由詠 .....03  
テーマ詠欄 「3」 .....16  
一首評 「そらよみ」 .....19  
短歌リレーコラム 「望遠鏡」 .....20  
リレーエッセイ 「いちごいちえ」 .....22  
次回予告・編集後記 .....23

うた  
た  
そ  
ら

Utasora  
＼3周年！／  
2024.  
March  
No. 19

うたそら 第19号

発行：2024.03.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi\_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>

Twitter ハッシュタグ #うたそら

「うたそら」では Twitter での感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号予告

第20号

連作欄 8首の連作 自由詠  
 テーマ詠欄 「野」  
 一首評 「そらよみ」  
 短歌リレーコラム 「望遠鏡」  
 リレーエッセイ 「いちごいちえ」



短歌募集



第20号 '24 4/30(火) 24時  
 ・8首の連作 自由詠 ・テーマ詠「野」1首

第21号 '24 6/30(日) 24時  
 ・8首の連作 自由詠 ・テーマ詠「雲」1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください  
<http://kohagiuta.com/utasora/>

編集後記

4月下旬の陽気かと思いきや、また雪が降りたりと気温の安定しない今日このごろ、皆さまいかがお過ごしでしょうか。くれぐれもお体には気をつけてお過ごしください。  
 さて、短歌誌「うたそら」は2021年3月の創刊から丸3年となりました。今号より4年目に入ります。変わらず投稿し続けてくださる皆さん、初めましての皆さん、たくさんのご寄稿をいただいているからこそ、ここまで続けてこれていることを大変感謝しています。ありがとうございます。  
 次号は5月発行、テーマ詠のお題は「野」です。たくさんのお題作品をお待ちしております。

編集鳥 千原こはぎ

今号のうたそら 第19号

- 参加歌人様 65名
- 連作欄 51名
- テーマ詠欄 49名
- 一首評 5名

ご寄稿いただきありがとうございます！

コラム 秋山ともす さん  
 エッセイ 奥村鼓太郎 さん



illustration: kohagi chihara

泳二	宇祖田都子	石川順一	十六夜ノ朔	池田竜男	井倉りつ	有村桔梗	新井きわ	雨虎俊寛	麻倉ゆえ	碧乃そら	か	大坪命樹	大橋春人	小仲翠太	歌島孟	がね	酒井井戸	河岸景都	かわはら	北谷雪	砧	きみづねゆめ	君村類	香子	くらたか湖春	くらだたけし	小泉夜雨	桜さくら	佐倉麻里子	汐射ハルカ	ま	西鏡	白石夜花	寿司村マイク	たえなかず	多香子	武井窓花	短歌パンダ	千原こはぎ	こもえ夕夏	中村成志	なべとびす	西淳子	肺	袴田朱夏	廣珍堂	笹地静恵	福山桃歌	布武せいら	ま	御糸ちち	深影コトハ	水柿菜か	水也	深山睦美	虫武一俊	村田一広	森内詩紋	杜崎アオ	杜野詩季	森屋たもん	悠佳里	れいあむ	臙
@Ejshimada	@Shimnyutu2020	@Hitler57	@izayoi_2022	@tankadragonman	@ura_lit	@chattenoire_k	@kiwa0419	@amefurashi3107	@AsakuraYue	@hane_a022		@hsweitt	@OotsuboMeiju	@hachidk2	@OnakasuiTanka	@Sinn1990	@amicus08	@karaido1111	@sukikanikan_kawa	@kitya_nomisomiso		@Oyukimagure	@kmmr_r09	@kyoko_shoji	@Koharu_kura	@tkuro2016	@kozumi_yau	@wjs59f8NwfuJYq3	@mrkmrk1987	@shioiri_haruka		@kasamabakuchi	@yohana_no_sekai	@Hk5bNR4wv1wY8M	@suzusuzu2009	@tankan_madoka	@kohagi_tw	@croissant_hey_z	@nakam8	@nabeab00	@jacky244Ray	@u_umii_i	@hakamada_shuka	@hirochin_dos	@ymcx6rjEzgwq	@momoka_fukuyama	@ps2310201	@mskpompomtUw23		@cotoha_mikage	@naka_mizugaki	@m_ya_o	@57577_77575	@mushitake	@nucci2022	@Nj40Ev95qjCRpu	@morisaki_ao	@4kitanka55	@monsonranka	@yukari_rito	@Rei4m_bot	@rou_tanka		

計65名

たくさんのご参加ありがとうございます！



# 19 リレーエッセイ いちいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んでそれをテーマにエッセイを書くページ  
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ 子  
書き手 奥村鼓太郎

子どもの頃、睡眠時間を除けば室内にいる時間よりも外にいる時間のほうが長かった。家の近くには海や川や公園があつて、時間が許す限りそこに居て、そこにあるもので遊んでいた。その頃は時計を持っていなかったから、というか必要がなかったから、太陽の位置や周囲の暗さで家に帰る時間を考えていた。家に帰るとご飯ができていたり、できていなかったりして、できていないときには料理を手伝うこともしばし

ばあつた。家ではすこし任天堂DSで遊ぶでお風呂に入って眠った。そのような一日が基本的には繰り返された。また、魚釣りをするようになつてからは、毎週海や川や池に行つて色々な魚を釣った。釣れるかわからない魚を待ちながらぼーっとする時間は、今でもよい思い出として記憶している。それに比べて今は、と考えてみると、今もあまり変わらないかもしれない。今は大卒4年生で、一度留年して来年も4年生になる。就職活動やアルバイトなど、年相応にしなければならぬことをしている。今暮らしている家の近所に海はないが、川はある。川に行けば魚や鳥がいて、それらを見ながら歩いていると、今すべきことから距離を取ることができて落ち着く。そうして家に帰ると、しないといけないことは変わらずそこにある。あるけれど、さつき鳥や魚を見たからもう少し取り組もうと思える。そう思えるのは、子どもの頃の原体験



が作用しているのかもしれない。昔はよかった、と思うことはまだない。これから思うようになるかもしれない。けれど自然が身近にある限り、そう思うことはないだろう、とも思っている。

## 軒先のソフトクリームの置物に抱きつく男の子、お元気で

奥村鼓太郎

## 仮面家族

新井きわ

靴下の穴から剥き出す生爪は血筋なんですぐんぐんと春正気とね狂気のあはひにゐるわたし言葉の鉈でぶぶぶん、殴る兄さんの鷲鼻 すこし生きづらく壁にぶついたりしたでせう。好きでぬでる海のなかでの秘密だよゆまりを放つ父さんのまね サングラス波に奪れた父さんが「生きてるよ」つて足をびらびら今際のね祖母の声が鼓膜を揺らすどれみふぁソプラノか細きソプラノ シナリオが間違つていた君の死後、はりりと一人きうりを齧る 弁当に過剰な愛を詰めてゆくアスパラ肉巻きてらてら光る

## 連作欄

# 8首の連作

自由詠

#うたそう



古利にて

雨虎俊寛

バス停は行基さんから信号を渡つてすこし歩くのときみ 肩の上で黒髪ゆんゆん跳ねているきみは歩幅を大きくさせて 均等に小さくならぶ白い歯がああね、ああねと語尾をつなげる 忍辱山の手前でひとりバスを降りサバゲーにゆく羅利天おりに 山門で撮つたふたりにお返しに撮りましょうかと言われるふたり 地域猫つぼさのあるきみ 血管が薄いまぶたにほのかに透けて 手を合わすきみの背すじが可笑しくて(国宝仏とおなじ傾斜で) 冬空をこぼして池の鯉たちは日溜まりのした色づいている

## 春隣

有村桔梗

ゆふぐれに取り囲まれてさみしさが細胞ひとつひとつに宿る 誤字ひとつそのままにして送りたるメールばかりがなつかしくなる 春隣 ひかりのなかに見失ふ花の匂ひの記憶をたどる わたくしはゆつくりゆかう いつまでも飛ぶことのないスワンボートで スカートの裾ゆらしつつ過ぎてゆく気のはやすぎる春の匂ひは ひとつあまる三連プリンは真夜中のわたしのためのやさしさだらう はつゆきになつて戻つてくるでせう冬にかへつたひとのたましひ

sub-way

井倉りつ

隠れたり逃げたり人を騙したりしなないと乗れない地下鉄がある  
 「で、どうするの？」世界を変えてみたくなるような声してずるいんだから  
 運命の人なんだったら掴んでよ 愛とか恋とか別のことでしょ  
 男とか女とか関係ないし君が石でもすきになつたよ  
 深く深く潜ればふたりしかいない ヒトでいるのも疲れてきたね  
 神様はいると思うよ バチだけを与え続けて笑う神様  
 地下鉄をおりれば外は現実で風が覚悟を促してくる  
 いつか磔にされちゃうそのときに笑顔でさよならできますように

開閉

池田竜男

タイトルが鯨の口で触れるとき子がうずくまるような暗雲  
 箱ティッシュ五個入りの袋引き開けて手紙の絶えた友思い出す  
 くしゃみだと気づいてくしゃみするまでに離陸しかけて着地する顔  
 鼻づまりに染み入ってくる銀杏のようだこの異国猿の目つき  
 高速がカーナビハックしてる間に大学受けるつもりと言った  
 似たようにサイドミラーを見るしかない目の不自由も折り畳まれる  
 洗い場で口論交わす懐かしい胸倉を見て手は開閉す  
 表裏ない電球に照らされる年老いてなおそっくりの父子

ボクたちの実存

十六夜／朔

ボクたちはそういつだってアノニマスやるべきことをやりもせずに  
 ボクたちは気付けば鳥籠いつのまに知らず知らずに大空捨てた  
 ボクたちはいつだって闘っている名前のない感情に揺さぶられ  
 ボクたちのホメオスタシスは狂ってるだからこんなにもアンビバレント  
 ボクたちはプロトトリスに襲われてるだからこんなにも生き急ぐんだ  
 いつかくるシンギュラリティそのときにボクらも人間になれるのかな  
 ボクたちが人間になれたそのときに、最初に消えていく人は、誰？  
 とある朝、シンギュラリティが訪れた。人間は生きる理由を失った。

「忘却と想起と遡行」

石川順一

カワセミを「翡翠」と書くか「カワセミ」と書くかで迷い「翡翠」に決め  
 忘却は凄まじいもの今日食べしフランクフルトを今夜忘れて  
 アドルフは風呂場で何を考える二月はまだまだ春ではないと  
 風呂場ではハートショックが恐ろしいうるたえる我呼びボタン押す  
 名前だけ首相に似て居る人が居る戦前の思考を共有しながら  
 千九百三十六年二月には帝都の雪が凍り付く頃  
 ニラレバを食べて翌日カレー食べ今日フランクフルトを食べる  
 逆光にならずに済んでうれしくてそれでも奥は光の固まり

う場合もあるだろう。反面57577展では、  
 連作を展示するには十分なスペースが確保でき、  
 面積の制約を心配する必要はほとんどなかった。  
 紙面の何倍もある壁面を自由に使えたのだ。そこ  
 で、最大十六首から成る岡野氏の連作の数々を、  
 壁を覆うほどの生地（ターポリンと呼ばれるビ  
 ニール素材）に印刷し、つなぎ目なくひと続き  
 に読めるようデザインしていった。連作として  
 かたまり感を維持しながら、行間も程よく設け、  
 かつ目線の移動が極力少なくなるよう心がけた。  
 文字は黒一色、フォントはすべて一般的なゴシック  
 系。文字以外の要素を取り入れるべきかは非常  
 に迷った点であったが、岡野氏の歌から感じる  
 ささまざまな“色”を表現したかったのと、空間  
 としてのストイックさや淋しさをなくしたかつ  
 たこともあって、「音楽」の表紙から着想を得た  
 柔らかなカラーのグラデーションを随所にさり  
 げなく配した。ただし『Ray』という連作につい  
 てのみ、可視光線を連想させるような多色づか  
 いの文字デザインとしている。今思うと、外光  
 が届かない展示室の中で、自然のひかりを擬似  
 的にでも表現したかったのかも知れない。

だけは決まっていた。私も大変感銘を受けた「天  
 才による凡人のための短歌教室」がそれである。  
 同書は、短歌を詠むに当たっての心構えやコツ  
 などが書かれた指南書のような本。読み進める  
 につれて、短歌を詠んでみたくなったり、うま  
 く作れるような気になつたりするのだが（少な  
 くとも私はそうだった）、その特異な読書体験を  
 展示でも再現できたらと考えた。可動式の壁で  
 長い回廊のような空間を作り、その両側の壁に  
 大小さまざまなパネルを並べることで、読み進  
 めることと歩みを進めることをリンクさせよう  
 と試みた。同氏の言葉や短歌を収めたパネルを、  
 飛び石のようにひとつひとつ渡っていくことで、  
 短歌の答えに近づいていける感覚を形づくって  
 みたかったのだ。また、同書のどのページにも  
 散りばめられている木下氏の短歌に向ける強い  
 想いを際立たせようと、パネルはすべてモノク  
 ロとし、文字のみに観覧者の意識が向くようデ  
 ザインした。総パネル数は六七。同書の内容を  
 ほぼ網羅したボリュームのある展示となった。

と、ここまで展示デザインの話を書かせていた  
 だいたわけですが、拙い言葉だけではなかなか  
 伝わりきれない部分もあったかと思えます。イ  
 ンターネットで「57577展」と検索してい  
 ただくと、展示の様子を収めた画像がいくつ  
 出てきますので、ぜひそちらも併せてご覧  
 いただけますと幸いです。現在準備中の57577  
 展2ndについても何卒よろしく願います。

【出典】  
 岡野大嗣 「音楽」 （ナナロク社・二〇二二年）  
 木下龍也 「天才による凡人のための短歌教室」  
 （ナナロク社・二〇二〇年）

【57577展2nd情報】  
 会期：二〇二四年四月二十日（土）  
 ～六月二十三日（日）  
 会場：町田市民文学館ことばらんど  
 観覧時間：10時～17時  
 観覧料：無料  
 出品歌人：岡野大嗣、木下龍也、鈴木晴香、  
 岡本真帆、田中ましろ、秋山智憲  
 展示デザイン：秋山智憲  
 協力：太田出版、ナナロク社



# 短歌リレーコラム

## 望遠鏡 19

短歌にまつわるあれこれについて

自由きままに書くページ

今号のテーマと書き手さんは…

書き手

秋山ともす

テーマ

57577展の

うらばなし

二〇二二年一月二十九日から三月二十七日までの二カ月間、町田市民文学館ことばらんどで開催された「57577展」。約五千人の来場者を記録した短歌の展覧会が、早くも第二回開催をこの春迎える。二〇〇六年に開館した町田市民文学館の歴史の中でも、同じタイトルの企画展を二回実施するのは初めてのことだろう。それだけ反響と手応えがあったと言えるのだろう。同館学芸員の山端穂氏にお声掛けいただき、「57577展2nd」の展示デザインとアートディレクション

屋上猿部 19

宇祖田都子

屋上に泉が湧いた私だけそっちの人類とのかけもちか  
春一番舟がないから海を消すマスクはおやつに含まれません  
コンパスを使ったことのない世代 猿を見たことないって本当？  
屋上に鳩が一羽も来ない日は承認しないすごい計画  
鳴り止まぬ鐘を無視して美術部の顧問がわたしの身体を盗む  
沈黙をもって応えよ肉体を喰い合う午後の茶会のメニュー  
良質な猿の餌にはなれなくて三年モノを淫らに流す  
新しき藁敷き詰めよ 新しき藁とは全部君のことだよ

ジープンを穴が空くまで履く人

泳二

ジープンを穴が空くまで履く人だ手は柔らかであいさつは小声だ  
窓からの景色大きくなる音にいつもの場所がわからなくなる  
雨上がり何かが始まる約束にただ遅れないように歩いた  
大切なものを半分くれるので春が待ち遠しくなる通り  
水槽のメダカを覗く横顔と秘密を洩らしそうなくちびる  
大切じゃなかったものが大切になる真っ直ぐな川治いの道  
いつか来る季節をふたりゆらゆらと光る水面に見ているだろう  
いくつかの波紋ができてこの場所にまだ居てもいいのかも知れない

も引き続き私が担当させていただくこととなっている。

第一回を振り返ってみると、展示デザインを思案するにあたってまず留意した点は「そこでしか味わえない体験」をつくることだった。参加歌人の皆さまの作品を、歌集の紙面とはまた違った楽しみ方で表現する必要があると感じていたのだ。一方で、歌人の方々と打ち合わせを進めていく中で印象に残ったのが、出品歌人のひとりである岡野大嗣氏の「デザインが短歌を超えないようにしてほしい」というお言葉。主役はあくまで短歌であって、デザインがその魅力を過剰に演出してはならないという核心を突いた助言だった。歌集と同様に、読み手へ届けるための短歌の最良の姿と、歌集とは異なる展覧会に相応しい短歌の新たな側面、そのどちらも具現化することで初めて、詠み手も読み手も満足していく展示になるのだと理解した。限られた予算の中で、というのもクリアしなければならぬ課題であった。

まれていく引力が魅力だと個人的には捉えており、それを観覧者の方に存分に全身で味わっていただくことを目標とした。ひと文字が手のひら大の一首を壁面の高さいっぱい配置したり、五面に一首ずつ据えた直方体（人の腰の高さほどある）を制作したりと、体ごと入り込める「短歌の部屋」を大胆かつ丁寧に仕立てていった。その部屋の調度品を統一するように、使用するフォントはゴシックで揃え、文字間や行間にも細心の注意を払った。

続いて岡野大嗣氏の展示スペースでは、主に同氏の第三歌集「音楽」からいくつかの連作を展示することが事前に決まっていた（連作の選択をこちらに任せていただいたのは大変光栄だった）。であるから、頭を悩ませたのも、いかに連作を魅力的に展示するか、ということだった。同時に常に頭にあつたのが先述した同氏からの言葉である。そこで行き着いたのは「連作を連作として見せる」というシンプルなお答え。歌集の中の連作というのは、往々にして紙面の面積の制約上どうしてもページを跨いでしまう。もちろん、ページを捲っていきながら連作を読み進んでいく楽しみもあるが、連作の連続性がページを跨ぐことによつて少なからず途切れてしま

春ばね

大坪命樹

蝉声がうら淋しかるうちすでに含める花咲く春が恋しき  
誕生日クリスマス正月誕生日結婚記念日 冬か楽しき  
若ききみケーキが冬をば楽しめど老いぬるわれぞ寒きのみかな  
寒き冬うせななむとぞ思へども猛暑を偲び炭素節約  
株分けし小さき葉々がガーベラにピンクが花咲くこの春もがな  
枝々のごつごつ黒き公園に一つ色あり 兆し金縷梅  
蛇蛭<sup>むか</sup>出でざるころに帰省するきみよ Uターン土産に春を  
今春がばね係数ぞいかほどか 気象が鍾<sup>おもり</sup>のみ増えぬるを

毒沼

大橋春人

雨粒を掴もうとして国道に飛びだしそうになった愚かさ  
立春を遠く離れて全国にロツテのコーヒーガムの復権  
ベランダにしばらく見えない雀らのもうすぐ春だ帰ってきなよ  
閏年 あと二ヶ月で八歳の五倍の時を生きてしまった  
布団より優しい国はありえない渴いた夜はセルフハグせよ  
レプリカの洞窟をくれ二十一世紀歌人の遺跡になるから  
節水を呼びかけている看板に降りやまぬ雨 ここやないやろ  
内面に立ち入るなかれ踏み込めばみな毒沼に沈めてくれる

遠い異国を行くワタシ

歌島孟

東京巡り

涸れ井戸

沈みゆくほどに多くを身に負うて遠い航路を行くのだ、船も  
場帝の罪は深く、ゆく河の流れは底を隠して光る  
陽は独り空高くいて、うつむけば、影は異国の土に寄り添う  
湖水からやわらかい風 生ぬるいビールのように喉元をゆく  
心無い男じゃ。心の臓が無い比干よ、空苳菜がおいしい  
痩せこけた猫を追いかけ、すり抜けてゆくようにして夜を歩いた  
タクシーは鼻歌まじり 開け過ぎた窓から顔へ吹きつける風  
無くなったものは見えない。崩れゆく壁の凹みにかかる月影

第3楽章

がね

つるぎを持たない

河岸景都

Andante 気持ち良いから変わらない動物園の猿山を見る  
Grave そして真夏に遺された蟬の死体がベランダにある  
Adagio 大人になっても給食の隅のトマトがずっと酸っぱい  
Moderate 蟻が運んでいる蟬の死体は蟻の栄養になる  
Animato 甥っ子を見るお父さんがじいじになって波打つ湖面  
Lento 日がひっくり返って月になるわたしがわたしに産む物語  
a tempo 辿りついても開かれないメッセージボトルを踏んでいる  
死に絶えるように歌えば終曲の終わりが終わる perendosi

勝ち取った宝物さえ手放して聖者は籠を置く人のこと  
正しさを叫ばないよう嚙む口 わたしはパンを水で飲み込む  
友達を一人も傷付けない誓い誕生日には言う「おめでどう」  
息継ぎが上手ではない生き物に光合成を説く残酷さ  
瘡蓋を誰より派手に塗りつぶすわたしを探す目印として  
題名を静かに飾るカリグラフィ、誇れるような指の優しさ  
空白を埋める単語を探すたび耳奥で鳴る正午の報せ  
心臓を赤いインクが過ぎてゆくつるぎを持たない手を振りかざす

一首評

# そらよみ



前号の「うたそら」から  
気になった一首をとりあげて  
200文字くらいで語る  
一首評のコーナーです

視線だと思って待ってみたいけれど穴じゃ  
ないかと思ってもいた

くろだたけし

確かに〈視線〉と〈穴〉はその外観に止まらず、性質や本質の部分で互いの存在を補充しあったり、同一性が見いだせてしまったりする関係にありそうだ。主体に待つことを意識させた存在が、視線なのか穴なのかは、歌を通して結論の出るものではないのだろうが、前述のような種の発見とそのことへの不気味なまでの説得力に浸ることができるところこそが、この歌の魅力なのだろうと思う。

一首評

西鎮

確かめるように歩いて立ち止まり今日の  
目印のため手をとった

泳二

笑うのではなく微笑んでいる バカ尾根  
をきみはかろがる上っていった

雀來豆

時系列順に動詞が並んでいて、読み進めると、否定もなく押し流される感覚を覚えます。時間は戻らないし止められない。生きていけば誰しも時間に押し流されてゆく。だから「今日の目印」はささやかな杭であり、それを共有する一瞬のかけがえのなさが切なく浮かび上がりました。

バカ尾根とは単調で長く、歩くのが馬鹿らしくなる尾根のことで、丹沢の大倉尾根などが該当するらしい。それを踏まえると「上って」がいかにか適切で、先をゆく「きみ」の飄々とした様子がどれほど眩しいかがよくわかる。となると上句の微笑みはきみのものとも思えるし、その人と行動をともにする主体のものでもあるようにも感じる。いずれにせよこの状況の楽しさはきみによって生み出されており、その全幅がかかるがろに託されている。

一首評

杜崎アオ

一首評

小泉夜雨

一首評

西淳子

ゆきちゃんの前では可愛くなかったし  
ゆきちゃんもかっこよくはなかった

白藤あめ

八首全体を見るべき一連。一首ずつ細かに見るだけではどうにもならない連作がたまにある。「ゆきちゃん」へへの思慕、思い出、苛立ち、憎悪、無関心、願。読むのでなく、題名を含めた全体を眺めるだけで「ゆきちゃん」が霞のようにこちらへぶつかってくる。これが事実に基づくのかフィクションなのか、どちらも正しい。読み手は、ただ「ゆきちゃん」に打たれ続け、言葉を無くしてゆくだけだ。

一首評

中村成志

絶唱はややソプラノで目を丸くしてる息子  
子とおんなじで、まだ

まさけ

六年間一度も鳴らすことのなかった防犯ブザー。その音を最後の思い出に聴いてみた息子の様子と親の思いが詠まれている歌。四首目で息子が防犯ブザーの音のことを「声」と言っていたのも詩的なんだけど、この歌ではそれを踏まえて「絶唱」と表現して、素敵だなど思いました。結句の「おんなじで、まだ」も倒置が効いていて好きです。おやすみをすすめる防犯ブザーとこれから成長して声変わりもするであろう息子の対比が表れています。





## テーマ詠「3」

言えないよきみの背中が遠ざかる春時雨ふる三月の嘘  
 ◆ 碧乃そう  
 3級は中卒レベル 合格で十五の自信を得る三十五  
 ◆ 麻倉ゆえ  
 まだ胸がそつと揺れてる三年目あれからきみはどうしてますか  
 ◆ 雨虎俊寛  
 角砂糖ひとつを夜にしづめたる三月生れの刺客のゆびよ  
 ◆ 有村桔梗  
 話す声笑う声不機嫌な声死んでも耳は聞こえてるから  
 ◆ 井倉りつ  
 柿の葉が落ちて実が成る野比のび太めがね外すと3があること  
 ◆ 池田竜男  
 メロデイが鳴りだしもう間に合わない3番線からサヨナラです  
 ◆ 十六夜ノ朔  
 三日前麻婆豆腐を食べて居たブロッコリーにはドレッシング掛け  
 ◆ 石川順一  
 トリニティー指先そして耳朶と鼻先は冷たい黙示録  
 ◆ 宇祖田都子  
 三年は長すぎたよねでも楽しかったねだから長すぎたよね  
 ◆ 泳二  
 もうやっと春になったと思うから3月をなぞる指先に蝶  
 ◆ 小仲翠太  
 三密が禁忌だったねあの冬も肩寄せあったよねヒヤシンス  
 ◆ 歌島孟  
 三日月を手に抱き立てる鉄塔の夜天に深く黒い骨格  
 ◆ 瀬戸井戸  
 作り置き何時でも残る三杯酢蟬が羽化する前の静けさ  
 ◆ 河岸景都  
 三月の寂しさばかり受け止めて空は別れの歌を覚える  
 ◆ 北谷雪  
 週末の晴天を祈るまいにちは3ポイントシュートの軌道  
 ◆ 砧  
 一人づつたちてゆくのか春霞こたへはつねに三なりけるを

パラソルチョコレート

汐射ハルカ

タクシーを途中で降りて白い息あなたに買ったアセロラジュース  
 星屑はまるでぼくらに微笑んでつきない夜がさみしくないね  
 楽しいよこんな隅っこ個室とはよべない席であなたと近い  
 思い出す最初のよこがお照れてるの？石狩街道周回してる  
 だんだんとあなたは酷く冷たくてこんなに陽射し暖かなのに  
 ももいろの刃もてきみ抉り出せわたしが夢の底に在るとき  
 後悔をしているよまだ渦巻いてどうして別れ切り出したのか  
 日常の流れの中洲ひかる粉意識の隙に漏れ出しただけ

犬の名は

鹿ヶ谷街庵

湿ってる、健康だねって俺の鼻さわって笑うきみが好きです  
 永久に気球が浮かぶ奇跡でもあればうつむくこともないのに  
 フカヒレを食べた呪いのせいなのか海馬に鯨が群がってくる  
 ファミコンのソフトに残る噛み跡がわが家の犬の遺品になった  
 愛だった キャラメルコーンを真夜中に買った頃のすべてが  
 うつくしいソ連映画を観たあとにテレビが映す燃えるひまわり  
 ていねいに海老の背わたを取るように黒い歴史を消した履歴書  
 コーヒーをこぼしたいいつも暗がり飲むからいつもこぼしてしまふ

橋脚

西鎮

ほろほると烏賊の沖漬け食んでゆく二月の部屋は旅の匂いす  
 鈍色の街区をゆけばひとりにもこんなにあわく降る順光線  
 もう能年玲奈と呼べない俳優の声も波めく三陸鉄道  
 少年の蒼白きその焦燥を刻んだ窓として自画像は  
 球根はおそらくラップサイセンでいつかの失言みたいな軽さ  
 また来る、と誓うみたいに言うきみを臨時列車がみ込んでゆく  
 凧いだ日にとどきみえるきみというダムに沈んだままの橋脚  
 おそらくは先発隊が飛びたつて湖面は春を映しはじめる

ルポ・コールセンター

寿司村マイク

ルポ・コールセンター同じ番号で二度目の無料お試し請求  
 ルポ・コールセンター嘔まずにドモホルン・リンクルです、と言えた森さん  
 ルポ・コールセンター低音重視した夢グループのCDラジカセ  
 ルポ・コールセンター生き別れの兄の声で呼ばれる「元氣してるか」  
 ルポ・コールセンター冷凍蟹を売る㊦駒田航わたのささやき  
 ルポ・コールセンターフロア全員がオレオレ詐欺のかけ子で逮捕  
 ルポ・コールセンターロシア原潜にオペレーター打ったピンガー  
 ルポ・コールセンターきみの声だけを 二十四時間受付中です

## ワンダフル・エトセトラ

たえなかず

聡明な君の瞳に撃たれゆくために真昼に丸腰で逢う  
 なんとなくキジトラ猫のとがる爪いずれ聖母となり横たわる  
 バッティングセンター 夜更けの空振りに流れる銀河を残像と呼ぶ  
 平たんな世界を歩く 善人は死ぬまでにあと何度恋する  
 雑草の呼び名があつて恋人の彼女の呼び名がない世界線  
 春の隅 ダークでディーブなくレンジングオイル女優のごとき涙が  
 どうか君 カレーは今も大盛りであれTシャツは新緑であれ  
 パーカーのフードは子猫が入るほど膨らみ春の風やや強し

## 子猫のように恋をして

多香子

ウサギさん遅刻だ遅刻とかけていく私は追わないアリスじゃないから  
 換気にと小さな窓を開けたすき飛び出た猫が戻ってこない  
 桃が咲く土曜の昼はうるわしく私ひとりの鍋焼きうどん  
 風花が冷たいことも知らないで今年生まれの子猫は眠る  
 特別な人だとずっと思ってた、春風ふいたらみんな忘れた  
 竹芝の棧橋に君を送る朝 東京湾にはぐれ雪降る  
 時がまた扉を開けて流れゆく私の全てを消し去らないで  
 さくら草あなたが好きと気が付いて今夜の夜行で逢いに行きます

## うつくしい傷跡

武井窓花

安心はなぜいつまでも怖いのか睫毛についた虹をみている  
 もしもあの左を選んでいたら、のもしもが君を傷ませている  
 昔した怪我の傷跡ならあつて紛れもないこれがわたしです  
 なぜこんな人生なのかと思う日もあつたしあるしただけ続いて  
 避けようのない現実はざんこくね祈りのために手のひらはある  
 いままさに何処かでひびく助けての小さな声もあるというのに  
 今日風が強いねどうか少しでも温かくして眠って欲しい  
 生き抜いてきた自負はあるそのことをうつくしい傷跡と呼びます

## 早春

千原こはぎ

春みたいな声って思う あたらしい季節にであうあたらしいひと  
 はじめての映画もランチプレートも芽吹くなにかを分け合うようで  
 (すこしだけ早足だから) いつもより速い鼓動の言い訳にする  
 この今を切り取るように窓はあり音もこぼさず見ているふたり  
 横顔の輪郭だけをぼんやりと辿る なんにもいえずそうにない  
 行く道は晴れてほしい ゆれる背がすこし陰って見えて ふれたい  
 一滴のことばで零れてしまえば水面にさざなみは広がって  
 夕焼けをふたり見送る早春のそのあとはわからないままでいい

## 揺れて(肆)

杜野詩季

拾われて実家に着けば妹がわらわら出てくる顔を歪めて  
 避難所でおにぎり持った手がやつと湯呑み茶碗の熱を喜ぶ  
 二時間の発電機タイム テレビには同じCM何度も流れる  
 被災者という当事者になったから何回も書く「罹」という漢字  
 微動だにせずにニュースに見入ってる 原発、建屋、原発、建屋  
 一覧に知りたる名前見つければ数の多さに目が追いつけず  
 トイレ用風呂水なくなりバケツ手に河原を降りるご近所さんと  
 (まず先に春の光は北陸に長く遍く暖かく降り)

## 育ち合う毎日

悠佳里

時短でも負う責任は変わらない抱える重さは17人分  
 担任同士声かけあつて助け合う手をひっぱって背中を押して  
 ついほっぺをふにふにしちゃう太ももに子どもがギュッと抱きつく間  
 目を浴びてびしょ濡れになつて虫飼つてそんな私もキライじゃなくて  
 「先生もママなの？」そうだよ自分の子と同じくらい君が可愛い  
 手のかかる子ほど忘れられなくて目の前の子もきつとそうなる  
 保育園で一緒に過ごした毎日が未来で力となりますように  
 4月からの成長思い見上げれば3月の空は美しい青

## basket

森屋たもん

朝食はパン派？米派？自らに問い続けて生きる蝸牛  
 水分と熱だけを摂るファイファンにお湯属性の攻撃は無い  
 ヨーグルトの賞味期限は二週間って決められていいなと思う  
 ウソじゃないことだけ言って生きていく昼休み終わりに埋めたブルー  
 地下道の中に小さなコンビニがあつて上より良いパンがある  
 私達は命を食べて生きているリポD以上モンエナ未満  
 豚肉を買って帰るとメモ帳に書いたから存在する豚肉  
 ソフトクリームを載せたコーンにとうもろこしは入っていない判っています

## 夜半虫

れいあむ

墓石の中に十月桜見ゆ塀の前では黄帽子の群れ  
 百日紅白くひらいて桃と咲き知られず生きて見られず生きて  
 しはぶきの数だけ夢の人のいるこの教室だからできる呼吸あり  
 猫のよにまるい瞳をした教え子にナズナの太鼓拵えてみる  
 おなじみの「きえたい」というLINEきて雨の音すべてBとなる夜半夜半  
 待つ雪の空の昏く遠いこと『雨ヨ』と書けど落ちるは滴  
 山ほどの葉を囁んだ背をさぐり引つ掻きすりすり。積もれ、雪花。  
 やさしさに躰を喰われる人ひとり物思う春されど世は春

## 透明な天使へ

水也

風の日におもうあなたは天の国しあわせですか願えはしない  
ひとりでは叶えられないお願いをここにはいない花へと捧ぐ  
天使とか鈴だとかいう なぞらえて生きていければ忘れられたら  
まるやかに落ちていく春、涙して青に染めてと己に縋る  
あなたがた幸福そうでまつしろで見せてくれるのうるわしさだけ  
紫陽花の色に重ねて塗った爪欠けた花びら枯れていないの  
刺草を、いいえ造花を編んでゆく痛む指から花冠を  
ぼたぼたと雫が落ちる透明な羽はあなたでかたどられている

## 架空の法律

深山睦美

掛け軸に不吉と書いて掛け軸の縁起を消した者は処刑す  
広告をずっと見ながら生きている安い眼鏡をかけているから  
おままごと中になされた犯罪は架空の法で罰するべきだ  
おままごと協会理事の会見はどこか現実味に欠けていた  
ラーニーはどこだと言おう そうだよ、業界人も誰が好きだよ  
西洋の甲冑を着た元カノが敲く月下のオートロック扉  
セーターをハンパーガーに着せないでハンパーガーは寒くないから  
ペンギンのいない動物園だつてやれるつてどこみせてやろうぜ

## わたしはスズメ

『王様戦隊キングオージャー』より

ともえ夕夏

兄様は民を愛せばあめつちを愛せば国の王となりたり  
花嫁になりぬるわれのうつくしき覚悟をとくと見送り給へ  
かのひとと覚悟のなかで生きてをりわれの探せし恋こそここに  
嘘泣きのうらがはにある泥臭きまことをきみよ聞きつけまほし  
米も麦も豆も菜もある食卓に兄様ひとときは高く笑ひぬ  
指環には愛の詞の彫られけりともに墮ちばや地獄の果てに  
われこそは気高きシユゴツダム国王フレレスハスティその妻なるぞ  
血潮熱き愛するひとはわが胸にさそりの毒で暫し眠りぬ

## 土下座

中村成志

網棚が網の棚ではなくなった頃の物語です あかつき  
噛み付かれ捻られ肩を剥がされる心地のなかの寝汗の蒼さ  
そうめんを二束茹でたときのよう陽の泡立ちが山に流れる  
くらがりの胴へマッチの火を移す灯油の匂い朝が震える  
パックからグラスへ注いでゆくときの橋のようなる牛乳の艶  
厳寒の車輪に研がれ内側の、内側だけのレールのひかり  
天空の糸いつせいに断ち切られ人は崩れる土下座のように  
ポラロイド写真一葉貼り付けて重さを増せばノートの皺よ

## 雨ちやない地点を探せ

村田一広

雨ちやない予報ないかとネット上探したら一つだけ見つかる  
まだ早いと思つて買ったその晩に冷え込みが来て毛布を使ふ  
この位ゆつたり聴きたいコンサートこの列に座つてるのは僕だけ  
お弁当コーナーよりも鮮魚コーナーに置かれて美味さうな寿司  
掘り起し掘り起しても何も無いパニアアイスそのものが宝石  
JRの気分次第で特急にも急行快速にもなる臨時  
田舎の駅はいいよね向かひのホームまで線路の上を歩いて行ける  
ここに来ると高確率で雨が降る雲の集まりやすい魔墟

## これは「うた」

森内詩紋

言い切れることは僕には何も無い だから無言でじつと見つめる  
正しさは大事だけれど人間は正しさだけで生きていけない  
君はまた僕を離れていくだろう遠い渚に飛び立つだろう  
僕たちが社会と呼んでいるものはただの枠組み 持続のための  
理解するために話そう話し合おう決して理解をされぬとしても  
真つ直ぐに生きようとしてふと気づく 歪みが無いという不自然に  
詠うことだけを頼りに生きている手放せば楽になれるはずでも  
これは「うた」？ ええ、たぶん「うた」僕だけの、いいえ、あなたの、そして、みんなの

## 順光

なべとびすこ

ももこの毛布のなかにいるうちは部屋の寒さを知らずに済んだ  
アンメルツヨコヨコたぶん地平線見ないで死ぬんだろう今世でも  
こんなにも読みたい本がある部屋でいま読む本が一冊もない  
自転車に乗らない日々で抜けていく空気のように忘れるだろう  
現実を現実として飲み込んでいくのが大人ならもう大人  
前年比プラスアルファの基本給いつか僕らも鉱石になる  
手袋が結んだままで落ちていいるそれはハッピーエンドのかたち  
カーテンを開けてもどうせ似たような光だろうな カーテン開ける

## 太陽系第3惑星

西淳子

ゴー☆ジャスの人さし指のように降る隕石。まだ助かる、マダガスカル  
テラバイト。地球のバイトは大変で80億を一人で回す  
「ちきゅうなげ」を「至急泣け」って空耳してゲリラ豪雨は女優の演技  
地球儀にキスするくらい今、わたし全人類を愛しています  
隕石と地球のキスを見るために彼女は宇宙飛行士になった  
地球グミを食べた佐々木が「本物のほうが美味かったよ」と微笑む  
ブックオフ火星店にて買い取ってもらった僕の『地球の歩き方』  
青い地球 NO MUSIC, NO LIFE? うたう。 (ぼへたき) TOWER RECORDS

天国なんかじゃない

肺

約束の消えてしまった手触りの話がしたいなら水面で  
 リンズインシャンプーなんて使うから接点のない海が枯れるね  
 夜通し雪を慰めている 遠くまでゆけないこともわたしの誇り  
 赤林檎 濡れて寿命を知りたがるあの子の口はいつも教会  
 みんなして劇だったのか沈むほどきれいにみえる正しさなのか  
 炭酸も消えるほど手を繋ぎたい 愛に容赦はしない火だから  
 天使さえあなたの前に敵として幾夜も現れる よろこんで  
 買う前の花束だけが無垢なこと うれしくて何度も買いつくす

うそ

袴田朱夏

ほったのぺたをわたしにくださいなあなたのほつがよくみえるよう  
 ずるいずるいあなたはミルクたつぷりのコーヒーそれをコーヒーとよぶ  
 完治しないのがわかるってどんな気分？ 右腕を上げたら下ろされた  
 ゆうれいをやめたら雲になりました、見えるでしょうか、消えるでしょうか  
 あそこまで行くから月は軽いでしょ、つかれた？ わたし？ 天使じゃないよ？  
 主人公だから死なない主人公だから死ねないだから死にたい  
 実ったら枯れるのだからわたしからうそになるまで言いつづけるね  
 天国にごはんはあると思うので味付けのりを持たせてください

ダイアリー 24/02/29

福山桃歌

しっとりどと湿っていきそう じゅんじつと読んでもいいと初めて知った  
 ランドセルだいぶ小さくなったなあ見送る子らのたくまじきこと  
 ぬるぬるとホームに停まる朝九時の電車 澱んだ表情映す  
 学年末試験二日目 しずしずと机間巡視の形式守る  
 着実に解答欄を埋めていく君の歩みよどうか止まるな  
 採点は戦いだからとつときのラジオの録音片耳で聴く  
 ぼんぼんと弾むボールの足取りで おかえり 今日もよく生き延びた  
 「春ってな、あったかい日がつづくんよ」知ってる、春はきみのほつぺた

赤い店

まさけ

ファミカセを売ってる横で雀牌とヌードランプ売る赤い店  
 コスモスは教訓を売る自販機だ 何かが違うキャラの消しゴム  
 親友の自慢のヘラクライストがロッチであった時の悲しみ  
 『ラファ・スン専用モバイルアーマー』大人ってのは難しいんだな  
 空き地には土管があつて土管にはエロ本があるという定説  
 兄ちゃんが薬局脇で買う箱をチョコと思つたそんな夏の日  
 あの頃の何かを清算するように肅々と進む区画整理  
 おそらくはここが跡地だ 墓標めく赤いとまれが佇立する場所

入マホの裏

廣珍堂

みんなとは違う願いの君の手はスマホの裏でふるふると揺れ  
 林檎へと吸われてしまえ膨らんだスマホの裏の消したい記憶  
 机にはスマホがぼつり忘れられ裏向きのまま待つひとがいる  
 高齢者たちもスマホで払い終え村のコンビニサロンのごとし  
 座席にはスマホの裏と冷えた手が並ぶ七時の準急電車  
 乙女らのフリックの指と嬌声にスマホの裏の指が嘘だよ  
 教師へとスマホの裏を見せている生徒が並び倫社反乱  
 ラーメンの汁がスマホの裏に付き表の「F」は返事が来ない

散歩は三步から始まる

笹地静恵

クスリなどいらぬボクのアタマにはポアンぽあんとポアンかれする  
 狒犬の左右に並ぶ石の橋わたりて石の社へ到る  
 ひどのいない公園がすぎ夕がたのいつもふらりとたたずんでいる  
 地下鉄のあるはずのない小都市の地下鉄に乗り飲み屋で下りた  
 雨あしと女と別れホテルにはベッドに眠る薔薇と人形  
 なにもない干潟を走る列車からデッキへ風の乗っては下りる  
 どうしてか思い出してるネコ肉屋ドリトル先生オシツオサレツ  
 ヒダリジンゴロウ作ねむりねこ眠っていないとぼくは感じた

雪の東京

御糸さち

キーワードさきやくようにゆれながら 木は 木は あわく影をおとして  
 患いし者の訪いしんしんと待つ夕刻の星医院 starch hospital  
 東京の雪の予報は信じない 令和もドライヤーはうるさい  
 イヤホンの左右をスマホの灯を以て確かめている 未来にいても  
 しらしらと夜は去りゆく引退でニュースになれるコンビはいいな  
 夢だけど雨はしつかり冷たくて夢だからって油断していた  
 雪の朝めざめれば子がもういない毎日遅刻ばかりする子が  
 でんでんと並ぶ車のその全てツノ出し楢出す雪のパーキング

乙女は変態する

深影コトハ

讚美歌の響く学舎の放課後のあめんぼあかいなアイスクリーム  
 演劇部・活動場所「礼拝堂」は飲食禁止（※バレないように！）  
 車座で読み合わせする人形の台詞は誰が読んでも悲しい  
 わたくしを綺麗に死なせる演出を放課後マクドで話し合ったね  
 男には触れさせたことのない頬に薔薇色を挿して男役の子  
 口紅を落とさぬようにストローで水を飲む蜻蛉の乙女ら  
 舞台袖の影のあわいに十代のひかるたましい産みつけてゆく  
 役という短き一生終えるたび乙女は何度も変態をする